

## フッサール現象学へのプロレゴメナ

小川 侃

京都大学大学院人間・環境学研究科 1993 年夏学期講義

(なお今回は最初の 4 回の講義を公開する。)

- I. 思惟の事象と諸々の現象に立ち帰ること
- II. 現象学の理念—厳密な学
- III. 現象学の方法
- IV. 本質直観
- V. 現象学的エポケー
- VI. エポケーと還元
- VII. 統覚＝統握の概念
- VIII. 意識の志向的分析と世界の存在論
  - (1) Noema と Noesis
  - (2) 意識と地平性
  - (3) 地平性と世界
  - (4) 地平性と存在論

## 序

1 4 回講義 (今回公開するのは第 4 回まで)

フッサールの初期ゲッチンゲン時代の最も優れた弟子でアドルフ・ライナッハという人がいます。…第一次大戦に戦死した人ですがその死を惜しむ人はフッサールを始めとして沢山おられます。---今日でも引証される「現象学とは何か」という講演の冒頭で次のように語っています。これは戦後現象学のドイツにおける華々しいチャンピオンだったクラウス・ヘルトの賞める講演でもありません。「現象学について (über) 語るというのは、世の中のもっとも無駄なことだ。もし、その語りの言葉に具体的な充実と直観性とをまずもって与えることのできるものが、—つまり現象学的な眼なざしと現象学的態度—が欠けているならば。」(Was ist Phänomenologie? München, 1957, S21)

この言葉は、私のこの講義においてもつねに導き手となります。

I. 「思惟の事象」と、「諸々の事象に立ち帰れ」と。

現象学について人が語るときに、多くのスローガンの如きものがみられる。曰く、「事象自身へ」、曰く「明証性原理」、曰く「思惟の事象へ」等々である。しかもおもしろいことにこの点に関してフッサールとハイデッガーとの間には、奇妙な差異がみられる。つまりフッサールは初期の『存在と時間』のハイデッガーと同じく *Zu den Sachen selbst*<sup>1</sup> という風に *Sache* の複数形を使用するのに対して、同じく後期のハイデッガーのように現象学的哲学を標榜しながら *Sache* の単数形を使用する。“*Zur Sache des Denkens*” というのがハイデッガーの最後の著作の1つの名である。もとよりこれらはたんなる言葉の綾なのではなく――厳密な意味での彼等の自らの哲学的思索を傾けた現象学の自己理解の差異にもとづくのである。してみればその差異に対して無頓着であってはならない訳だ。その差異はどういうところにみいだされるのであろうか。その差異はどういうところに由来するのであろうか。この問いに端的に答えることは、さしあたって控えておくことにしたい。その答えは、おそらくこの講義時間の終わりにみいだされるであろう。と同時にこの答えは更に多くの問題を提起するにちがいないのである。

レーヴィットやライナッハなどという直弟子の人々が今日の我々に伝えてくれているように、フッサールは演習においてつねに事象自身に立ち帰り、「小さな概念」による努力をしたうえで、事象のロゴス（関係構造）を浮かびあがらせるように要求する。「高額紙幣で払うのではなく、小さなコインで支払え」と言った。「支払う」とは *einlösen* であり、これが、つねなるフッサールの口癖であった。したがってゼミナールの参加者が、たとえフッサールの旧著の引用をして議論をしても、それを受けつけなかったといわれている（高橋里美）。議論で問題なのは、今此処で、もう一度初心者にかえって分析しなおすことである。その意味では、現象学という学は、フッサールの著作をいくら綿密に、いわば

---

<sup>1</sup> 正確にいうとこれはフッサールの始めた現象学的方法をハイデッガーが定式化したということだ。奇妙なことにフッサール自身はこの定式化は言葉としてはみあたらない。ただし後にのべるように『論理学研究』『厳密な学としての哲学』に暗示的な仕方で表現されており、それをハイデッガーがたくみに定式化して『存在と時間』で使用した。初期のハイデッガーは、なおも現存在分析、人間存在のあり方に関心を持ち、人間をとりまく様々の現象（複数性）に関心をもっていたのである。

文献学的に、歴史学的に研究しても不十分であるという側面をもつ。西田幾多郎門下の現象学者で優れた学識をもってなる方に三宅剛一先生がいる。私が最後にお会いしたときに、三宅剛一先生はその故に「現象学というのは本だけを読んでいても分からないところがある。現実を見ることが重要だ」といわれたのである。このことに付記して更に思い起こしておきたいのは、私がクラウド・ヘルトという戦後の現象学の最高の成果『生き生きした現在』を書いた現象学者から学んだ現象学についての基本的姿勢である。彼もまた「事象自身に立ち帰って」思惟し、且つ「概念の努力」をおこたらぬことを強調していた。このように多くの現象学者が、「事象自身」に帰り、そこから思惟と分析をすすめるということには、一体どのような意味があるのだろうか。

フッサール自身は、このような基本的態度を、方法的格率と自己理解していたであろう。それは、『厳密学』のなかでは、言語の意味分析を行うだけのスコラ哲学に対して、「事象を我々は問わねばならない」といっているし、このテーゼを示すもっとも古い箇所は「我々は事象自身に立ち帰り行かねばならない」という『論理学研究』の第二巻の序論の中の言葉である。(L.U. II / 1, s.6) (Halle, 1901)おなじことは、『論理学研究』L.U.I.の第二版の序文においてもいわれている。

このようにもっとも初期からフッサールの基本的態度を規定している「事象に立ち帰れ」というのは、どのような意味をもつのか。私には、この方法的な格率は、原則として、現象学の原理に固く結合しているように思われる。現象学の原理とここでいうのは、Ideen I.で「諸原理の原理」としてのべられ、今日では明証性原理として理解されている原理である。それをフッサールは、『哲学と現象学研究のための年報』第一巻の序文では、現象学者の学派としての統一性を保証するものだとみていたのである。現象学者が一緒になって共働作業を行い一つの哲学的研究をおすすめることはできるのだ。そのとき重要なのは、一切の認識の権利源泉としての意味能与的な直観である。すべての認識にその正しさの根拠を与える原理は、事象に意味を与える「見ること」である。これをフッサールは、明証性の原理として把握しなおしたのである。最近になってこの年報の序文がフッセリアーナに復刻されている。「【この年報の】編集者たちを結合しているのは、学派としての体系ではない。将来の共同研究者のすべ

てにおいて前提とされるべきであるのは、学派の体系ではない。彼らを結合するのは、むしろ次のような確信である。直観という原本的な源泉と、その直観から汲み取られるべき本質洞察とに立ち帰ることによってのみ、哲学の偉大な伝統は、概念と問題に即して価値づけられるのだし、またこのような道をとってのみ、諸概念は直観的に解明される。つまり、諸々の問題は直観的な根拠の上に新たに立てられ、そしてまた原理的にも解決されることができるという確信である。」(Hua. XXV, 62-63) この『年報』の第一巻が出版されたのは、1913年であり、この同じ年報の冒頭にフッサールの『イデー』第一巻 (Biemel-Ausgabe, s.52) が同時に出版されている。この『イデー』第一巻第24節が「一切の原理の原理」と題されており、フッサールは現象学が現象学と呼ばれるかぎりこの原理にもとづくと考えた。もちろんハイデッガーはのちに、この原理に更に改変を加えて、現象概念のうちに鑄造し直してしまう。〈自己を示すこと〉とは、ハイデッガーにおける現象学の原理である。このことには、この講義の後に立ち帰ることになるだろう。

フッサールの「諸原理の原理」は、次のように定式化できる。

1. 原始的に能与的な直観が認識の権利源泉である。この点について付記しておけば、「認識の権利源泉」といわれていることにも注意を払うべきであろう。フッサールはあくまでも認識問題に定位している。

2. ついで直観のうちで我々に自己を原始的に呈示するもの (Sich-originär-Darbiehen) は、自らを与えるもの (Sich-Geben) としてひたすら単純に受け入れるべきである。これにフッサールは更に次のように付記している。自己呈示するものが、自己を与えるかぎりにおいて、その枠の中でのみ受け入れるべきである。

3. これら二つの事柄が認識の絶対的始元であり、また「原理」であるということを示す。

フッサールの一切の原理の原理の特徴は、原始的直観のもとに、認識の権利源泉をみることであり、真理性の基盤はすべてこの認識の権利源泉たる原始的直観に依拠するというところにある。それとともに、原始的直観の内容は、原始的に自己を呈示するものが、自己を与えるものであるということである。だが、この「自己」とは何か。私の問いを立て直すと、Sich-Darbiehen (自己を呈示すること), Sich-Geben の Sich とは何か、である。この Sich (自己) は、現

象学的に考察する人に対峙し、この対峙の距離の明るみの中で自己を呈示するものである。この自己をフッサールは、「事象それ自身」(die Sache selbst!)という仕方で表現したのである。この意味では、事象が自己を呈示し、自己を与えることが、同時に現象学の原理を言い表していることになるであろう。それはいわば「事象自身に立ち帰れ！」(Zu den Sachen selbst!)というときの>>Selbt<<である。事象のそれ自身とは、事象を成立させている同一的なものである。したがって、このような事象それ自身に立ち帰るということを、フッサールは原始的直観による自己呈示するものが自己を与えることとして受け入れるための原理として自己解釈したのである。この自己解釈を、もっとも典型的に明証性に結合して解明したのは『デカルト的省察』においてである。文献学的にみると、もとより明証性という概念は、すでに早くから現れているが、しかし、それを現象学の基本的原理とみて、徹底的に解明しているのは『デカルト的省察』と『形式的論理学・超越論的論理学 (Formale und transzendente Logik)』においてである。さて上のようにみると、「事象に立ち帰れ」というフッサールの合言葉と、現象学の原理との間の深い関係を読み取ることができよう。事象とは、「現象」に他ならない。現象とは、まさしく自己を呈示し、自己を与えるものであるから。Zu den Sachen selbstとは、したがって自己を呈示するもの、自己を与えるものに立ち帰れということであった。事象＝現象＝自己呈示＝自己能与というのは、すべて同義語であり、フッサールはそれをあくまでも「原始的直観」により解明しようとする。事象に立ち帰れとは、いずれにせよ「現象に立ち帰れ」である。これが現象学の原理である。そしてこの点からみれば、何故フッサールが Zu den Sachen selbst という風に Sache を複数形でのべ、後期のハイデッガーが Zur Sache des Denkens という風に単数で表現しているのか、ということも理解されえよう。

それというのもハイデッガーでは Sache とはただ一つ、つまり〈あるもののあること〉 Sein des Seienden である。ハイデッガーの現象という意味での事象は、Sein のみであるから、Sein の主題化という意味での現象学の原理は Zur Sache という風に単数でしか表現されえない。ハイデッガーでは「政治の存在論」というものは考えられない。だからハンナー・アレント (H. Arendt) がハイデッガーに彼女の著書『人間の条件 (Vita Activa)』を贈ったときに、ハイデッガーは不快に思ったという。(Vollrath の報告。Otto Poeggeler (hrsg.)

Heidegger und Praktische Philosophie,S.357 以下) 彼女は政治の現象学を書いているから。それに対して、フッサールでは、どうして、「様々な事象に帰れ」という風に事象が複数形で表現されているのであろうか。フッサールにおいては、**phaenomen=Sache** はつねに複数形で語られる。フッサールの中には、複数の存在論体系を許容するという考えが基礎にあり、様々な現象に立ち帰ることが求められる。なぜならば、フッサールは領域的存在論の思想を堅持していて、この複数的領域性(つまり質料的存在の最高類概念を領域 **Region** と称している)の思想がフッサールを導いているからである。フッサールでは、存在論的体系は、複数性において可能である。このことは、想像の世界、非現実の世界の存在論が一つの可能な世界として認められているということをかえりみれば見易いことであろう。フッサールにとって重要であるのは、現象とは一つのものではなく、様々な次元での、様々な場面での様々な現象であり、この意味では、フッサールの中に、存在論の複数性の思想を読み取ることもできる。フッサールにとっては仮象 (**Schein**) さえもが、人間の出会う現象であり、「仮象の現象学の可能性」をも示唆している。

フッサールを、しかし、このような存在論の探求者とのみみることはできない。今日ステレオタイプなフッサール像として定型となっているのは、むしろ、超越論哲学者としてのフッサール、意識の分析の探求者としてのフッサールであり、且つまた、生活世界の哲学者としてのフッサールである。これらはすべて、フッサールの哲学の帰結点から彼をみて作られた1つの像である。

フッサールの帰結点からみると、彼の哲学は超越論的であるといえる。その場合超越論的というのは、領域的存在論と形式的存在論の体系が、究極的には超越論的主観にその意味づけを負っているという点においてであり、こういう考えは、『イデーニ I』の「理性の現象学」の章によく表現されている。フッサールは、ここでは特に純粹現象学に定位しているから、純粹自我による純粹な超越論的現象学が、直観によって諸学問を権利づけるのだ、と考えている。ここで権利づけるとは、根拠づけるということと同じ意味である。一箇所だけ引証箇所を与えておこう。フッサールは次のように書いている。「現象学が始めて超越論的に純化された意識における直観という源泉に立ち帰ることによって、次のことを我々に明らかにしている。我々が真理の形式的な条件や認識の形式

的条件について語るとき、そのことのうちには本来どういうことが存するのか、ということをはっきりしている。」

一般的にいつて現象学は、認識、明証性、真理、存在（対象、事態等）などという概念に帰属している、本質と本質関係について解明しており、現象学は我々に判断する働きや判断の構造を理解させる・・・」（Hua.Ⅲ. S. 360f.）このように超越論的に純化された現象学は、我々人間の認識の働きや存在の本質構造そのものを解明しているとフッサールは主張する。他方で現象学の原理が主張する *Sache Selbst*（事象の自己自身）への立ち帰りというものは、どのような認識の態度からも自由に、事象をそのものにおいて見ようという態度を含意している訳であり、これはむしろ一種の客観主義を表明していることになるであろう。*Sache* は、どのような主観的はたらきや態度からも独立の、そういう主観性の影響を免れた次元に帰属していると思われる。この意味でフッサールは、現象学のうちに、主観的構成を目論むことをせず、むしろある客観的事象の自己解明という方向をうちだしたのである。フッサールの創設した所謂現象学的運動が初期のゲッチンゲン学派において大いなる浸透をみたのも、彼の現象学のもつこの事象主義、もしくは方法的客観主義のおかげである。この方法的客観主義は、特に本質直観の方法として賛同を受けたものである。

このようにみると、フッサールの現象学の中にみいだされる方法としての客観主義と帰結しての主観主義との間には、一体どのような調和する点がみいだされるのか。クラウス・ヘルトが最初に指摘して以来この問題は多くの影を現象学研究の動きの中に投げ入れている。私も一つの解決の試みを提案した。それは、最初関西哲学会で話し、そののち、ドイツ現象学会（*Deutsche Gesellschaft für phänomenologische Forschung*）の雑誌（*Phänomenologische Forschung*）の24/25巻にドイツ語訳されている。

現象学の方法論的客観主義と、帰結しての主観主義という亀裂もしくは分裂は、フッサール自身にもよく意識されていた。たとえば『論研』の序文（Ⅰ巻とⅡ巻）にこの分裂の苦悩を読み取ることもできよう。『論理学研究』第一巻の第一版（1900）の序文の中で、すでにフッサールは、第一に与えられた諸科学を心理学的分析によって解明するという心理学主義からの撤退を宣言し、次いで論理学の本質を批判的に考察するという目論見をのべている。それは究極的には、「認識の働きの主観性を認識内容の客観性との関係において批判的に反

省すること」(LU,Bd.I.序文 S. VII)であった。このような課題は、フッサールに、論理主義と心理主義の間という狭い間道を切り開くように強いたのである。このことが示すのは、フッサールの中の論理学主義、心理学主義、超越論主義という様々の態度は、彼本来の思惟の揺れ動き、つまり主観主義(心理学主義)と客観主義(論理学主義)との間の揺れ動きを示すであろうということだ。

フッサールの思惟の特徴はこれらの道のあいだにあり、それをどのように根拠づけるか、ということにある。フッサール自身は、それを超越論哲学と自己理解し自己解釈したのである。だが、すでにのべたように、超越論哲学自身も、一つの主観主義ではないのだろうか。